**上村　忠郎 （うえむら・ちゅうろう）**

**１、プロフィール**

俳人。高校卒業後「青年俳句」を起し全国的に名を馳せる。その後、「北鈴」の編集人、「たかんな」編集長を務める。八戸を含めた県南の俳壇に残した足跡は大きい。

＜生没＞

昭和９（1934）年４月９日～平成10年（1998）年９月10日

＜代表作＞

私家版句集『草の花』（昭和44）。

句集『貌』（昭和58）。

他にコラム集『千本槍・花筏』（平成９）。遺句集『梨花月夜』遺稿集『鯊の秋』（ともに平成16）がある。

＜青森との関わり＞

南津軽郡浪岡町に生まれ、少年時代を津軽の西海岸地方で過ごす。八戸高校を卒業後、八戸を拠点として活躍。

**２、作家解説**

昭和９（1939）年、青森県南津軽郡浪岡町大釈迦（現在は青森市大釈迦）に生まれる。旧国鉄職員であった父の転勤により県内を移動。岩崎中学校２年生の時、「毎日中学生新聞」の文芸欄の佳作に〈雪踏みの子に郵便の荷が届き〉の句が入選。俳句の道に進むきっかけとなる。昭和28年、青森県立八戸高校卒業。29年、同人雑誌「青年俳句」を編集発行。「青年俳句」は、寺山修司の「牧羊神」と並び全国的にも有数のものであった。寺山修司も最初加わっていた同誌は、33年に24号で終刊となる。32年、「デーリー東北新聞社」に入社。整理部に長く籍を置く。34年、八戸俳壇に競いあっていた、「すすき野」「北地」それに「青年俳句」を一つにまとめて、しゅらが「北鈴」を起こした時、その手腕を買われて編集人となる。以後25年間、終刊まで支える。その間、44年に二男が事故死するという痛恨事がある。それまでの20年間に作られた俳句より百句を選び、「吾子の霊に捧ぐ」として限定版『草の花』を出す。その後、58年に句集『貌』を上梓。哀歓に満ちた優れた句集であり、俳人協会の新人賞候補に挙がった。あまりに上手すぎ新人らしからぬため、受賞を逃したという話がある。一時、小林康治創刊の「林」に参加。小林の死による「林」終刊後、平成５（1993）年に「たかんな」を起した藤木倶子氏に編集長として迎えられ、後に副主宰となる。

俳句はもちろんだが、文章をよくした忠郎氏は、デーリー東北新聞社での最後の10年、論説委員として「天鐘」という一面のコラムを担当した。週に５日、全部で2300本以上を書いたという。平成９年に出版されたコラム集『千本槍・花筏』は、中から130本を選んで一冊としたものである。定年を迎えた７年の７月、いよいよ俳句一本に打ち込んで行こうとしたところで、脳梗塞に倒れる。10年、死去。16年、夫人の意思により、遺句集『梨花月夜』、遺稿集『鯊の秋』が刊行される。